



認知症ケアスーパーバイザーに求められる役割に関する 文献研究

主任研究者 山口 友佑（認知症介護研究・研修大府センター研究部）

背景・目的

認知症ケア実践現場では、認知症を持つ人が大切にされていると感じながら生活を送ることができるよう、質の高い認知症ケアを実践していくことが専門職には求められている。そのためには、認知症ケアに関する専門的知識を習得することができる機会が必要であり、その一つとしてスーパービジョン(以下、SVという)を展開していくことが挙げられる。本研究では、諸外国の文献をもとに、認知症ケア実践におけるスーパービジョン(以下、SVとする)研究の 現状について把握することを目的とする。

方法

- PubMedを用いて検索を行った。 (“supervision”[title])を固定のキーワードとし、 (“dementia care” or “dementia”)、 (“nursing care”)、 (“long term care”)をANDでつなぎ検索を行い、重複している文献を除外し、「Article type」を、「Review」、「Systematic Review」、「Meta-Analysis」に限定し、表題、要約、本文から、認知症ケアに関するものか否かを検討を行い、5本を本研究の対象論文とした。
- 倫理的配慮として対象となった文献の取扱いについては、文献を正確に読み込み、原著の結果や考察を侵害しないように配慮した。

結果

- 年度別の集計としては、1990年代が1本、2010年代が3本、2020年代が1本であった。
- SVの対象領域は、看護師を対象としているものは3本、在宅のケアワークを対象としているものが2本であった。
- 文献の整理から、定期的にSVを実践することで、①仕事に対する満足度、②離職の防止、③利用者のQOLや満足度の向上、④職務ストレス軽減に効果があること、SVにおいてスタッフと認知症高齢者の関係を促進するまたは阻害する要因に焦点をあてることで、ケアの改善や質の向上だけではなく、スタッフの労働の質を向上させる可能性があることが明らかになった。

考察

- SVは、バイジーのレベルに沿った能力の習得と、高度な実践ができるよう専門職としての成長を目指した指導方法として位置づけられており、認知症ケアSVには、認知症ケアを実践する専門職としての成長を目指すことを目的としたSV実践が求められているといえる。
- 認知症を持つ人が自分らしく生活を送るためには、生活を支えるスタッフ自身が過度なストレスを抱えず、満足感をもってケアを実践できる環境を整備することが必要不可欠である。そのためには、定期的にSVを実践し、自身が認知症ケアを実践する中で伴って抱く複雑な感情を言語化し、共有する機会を、組織的に確保することが重要であるといえる。

まとめ(今後の課題)

- 認知症を有する人のケアの質の向上に効果的なSVに関しては、エビデンスが不足しているという課題があることもあり、さらなる研究が必要であることが課題として提示されていることから、引き続き、認知症ケアSVに必要となる要因について検討を重ねていく。